風姿花伝第二、物学条々　法師

これは、此の道に有りながら、稀なれば、さのみ稽古入らず。仮令、荘厳の僧正、幷に僧綱等は、如何にも威儀を本として、気高き所を学ぶべし。それ以下の法体、遁世、修行の身に到

〔口訳〕　法師の物真似は、能の方にある事はあるが、稀にしか出ないものであるから、さほど稽古も必要ではない。大体より言つて、荘厳の僧正や僧綱などは、如何にも威儀をととのへる事を本とし、気高い所を学ぶべきである。それより以下の法体者、遁世修行などの僧に於ては、これ等は行脚を本とするものであるから、如何にも深く仏道に思ひ入つて居るといふやうな姿風情が、肝要であらう。しかし、出し物の曲柄によつては、思の外に手数のかかる法師の物真似もあるであらう。

りては、抖擻(とそう)を本(ほん)とすれば、いかにも思(おも)ひ入たる姿懸(すがたか)かり、肝要(かんよう)たるべし。但(たゞ)し、ふし物(出?)に因(よ)りて、思(おも)ひの外(ほか)の手数(かず)の入事(いること)もあるべし。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『世阿弥十六部集評釈 上巻』能勢朝次 著